

〈研究・調査報告〉

幼児の社会的やりとりにおける身体接触 —身体を通した仲間関係の探索—

広瀬美和

【要旨】

本報告は幼児同士が身体的なかかわりを通して仲間間の関係調整をしたり、仲間を理解したりすることの様相について探索したものである。保育や子育ての場面では言語的なかかわりがより望ましいものであるかのように扱われることが少なくないが、幼児同士のかかわりにおいては身体的なかかわりが多用されている。幼児たちの間で言語だけにとどまらない、複雑なコミュニケーションが行われていることを示すために、保育所等の集団生活場面において幼児同士がかかわる際にどのような身体接触をしているのかを自然観察によって抽出した探索的研究の結果を報告する。

キーワード：幼児の社会性、身体接触、仲間

1. はじめに

子どもの身体は、心や行動の発達とどうかかわるのだろうか。ヒトは生理的早産の状態で生まれると言われる (Portman, 1995)。他の種に比べて未熟な状態で生まれるヒト乳児は、移動にも栄養摂取にも排せつにも他者の力を借りるため、一日のうちのかなりの時間を養育者などと身体的に接触した状態で過ごすことになる。身体的に接触することは、単なる「世話」だけを意味するわけではない。接触しながら次第に自他の理解も発達させていき、「抱っこ」は単に移動手段であるだけではない。また、身体的なかかわりの慰撫効果については古くはHarlowのアカゲザルの実験が有名であるし、神経生理学的な機能についても明らかになってきている (Olausson et al., 2010)。撫でたりさすったりだけでなく、家族の中でくすぐり遊びなど、少し乱暴だがポジティブで親密な身体接触を経験してきた人も少なくないだろう。生活の自立に従い、親子間での身体的な接触時間は減少していくが、身体的なかかわりは子どもたちの社会が拡大していくにつれて仲間間の関係へと拡大していく。幼児の仲間間の関係調整には言語的なやりとりに限らず、身体的なやりとりが多くを占めたり、言語的な方略単独ではなく身体的なものと同用されたりすることも指摘されている (高坂, 1996 ; 広瀬, 2006)。幼児たちが、集団での社会的なやりとりの中でどのような身体的なかかわりをしているのかを探ってみたい。

2. 幼児集団における身体的かかわり

今日、日本においてはほとんどの子どもが、幼稚園や保育所、認定こども園などの就学前教育・保育施設に通い、かなりの時間を他の子どもたちとの集団生活の中で過ごす。家族よりも格段にサイズアップした集団である就学前教育・保育施設は、子どもたちにとって重要な社会性獲得の場であり、またその発達は幼児教育の重要なテーマである。集団ゲームなどを通して規範意識を身につけることや、けんかなどの社会的葛藤を通して視点取得能力を発達させることも求められている。しかし、私たちが幼児のけんかを目撃したとき、まず何と言って介入しようとするだろうか。特に幼児が取っ組み合いのけんかをしているときなど、私たち大人は、子どもたちに向かって「お口で言えばわかるよ」「言葉で言わないとわからないよ」などと、ついつい言っていないだろうか。実際に保育者たちが幼児のいざこざに介入する際には、話し合い場面を設定したり相手の気持ちに意識を向けさせたりする傾向が見られ（広瀬・柴山・福元，2018）、できるだけ言葉でのやりとりをするように奨励している。

しかし果たして幼児たちは「お口」「言葉」だけでわかり合っているのかというと、そうではなく、前述のように身体的な方略を多用しているし、それを未熟なコミュニケーションと片づけていいものだろうか。

幼児たちの身体的なかかわりについては、砂上・無藤（1999）は、他者と同じや類似の動きをすることを「同型的行動」と呼び、幼児の身体性と仲間関係の関連について検討している。同じ場で同じ方向を向いて寝転がったり、鏡のように動きを真似したりすることで遊びが開始されることが幼児の集団ではよく観察される。同じ動きをすることで快の気分が共有されて共鳴・共振している姿をとらえており、仲の良い場合にこのようなことが見られることから「同型的行動」を「親しさ自体」と表現している。仲間間の親密さを、身体感覚で共有することと主張しているのである。

身体の動きだけでなく、接触による効果についても指摘されている。根ヶ山（2002）は、親子間だけでなく、仲間間についても身体接触の重要性を指摘している。特に身体遊びを取上げ、仲間間で身体接触を交えつつ楽しく遊ぶことが、社会性の発達に重大な意味を持つとも指摘している。さらに、実験的な検討によっても、幼児間や大人から幼児への身体接触の効果が明らかにされている。山口（2004）は、保育園児のなかで、問題行動を起こすとされている子どもに対して、友達同士で手をつないで輪になったり、大人が肩や手によく触れる遊びを取り入れたりするなどの実験を行なった。その結果、接触を行った実験群では有意に望ましくない行動が低減したことを報告している。接触の欲求が満たされることで幼少期の子どもの心が穏やかになることを主張しているのである。

3. けんかか遊びか

そもそも幼児たちの遊びには、rough and tumble play と呼ばれる相撲やプロレスごっこなど、身体同士で激しくぶつかり合うようなものがよく見られる。子どもたちのわんぱくな遊びは、遊びなのか、それともけんかなのかという区別がつきにくい。大人が慌てて止めようとしたとき、子どもたちは実は「遊んでいただけなのに」と遊びを中断されたことを不服に思っているかもしれない。レスリングなどの子ども同士の身体的な遊びは、見ている大人よりもそれに参加する子どもの方が、遊びであるかけんかであるかの判断が的確にできる特徴を持っている。Smith (1997) が、ビデオ画像で Play fight (遊び)、real fight (けんか) なのかを区別させる実験を行ったところ、子どもたちよりも教師や母親の方が判断に失敗するという結果が示されたのである。子どもたちの方が、からだから発せられる言語だけではない複雑で微妙な情報を読み取ることに長けているのかもしれない。子どもたちは、一見第三者からは攻撃と判断されるような激しいやりとりの中で、当事者同士では遊びを成立させている。小山 (2003) は、子どもたちが一見乱暴に見えるかかわりのなかでうまく遊びを成立させているのには、当事者間では身体接触中に交わされる筋肉の緊張と弛緩のなかに遊びを伝える要素があるためではないかと指摘している。つまり、子どもたちは身体を接触させながらメタコミュニケーションをしているのだ。子どもたちは実際に身体的にかかわりあいながら、相手の力加減や表情から怒りや緊張の度合いを推し測り、そこに笑いや遊びの要素を読み取ることができれば、それはけんかではなく遊びと判断する。離れて見ているだけではなく、リアルな感覚経験として、接触しながら相手の身体の緊張・弛緩具合を感じ取り、表情を間近で目撃できる子ども同士のかかわりあいだからこそ、その複雑な判断が可能となるのではないだろうか。

4. 幼児の集団場面での身体接触

最後に幼児同士が実際の集団場面でどのように身体的なかかわりをしているのか観察した結果について報告する。

目的：幼児同士の身体的かかわりがどのようになされるのかを、自然観察法により接触内容と接触部位を抽出する。

方法：

- ① 対象：東京都23区内K保育園3～5歳児異年齢編成クラス3クラスの幼児59名、平均月齢59.83
- ② 観察期間：2023年9月12日～14日、午前9時30分～11時00分（合計観察時間計270分）
- ③ 観察方法：保育園の自由活動時間を子どもたちのやり取りに介入せずにビデオ記録し、自然観察法により観察を行った。

結果：

観察終了後にビデオデータから身体接触場面を抽出し、接触部位と接触している文脈についてのテキスト記録を作成した。全部で47場面の身体接触が見られ、それぞれの接触内容と接触部位について表1に整理した。

表1 幼児同士の身体接触

接触部位	接触内容
1 頭部	殴るマネをしながら頭をなでる
2 手	同じ玩具を手を重ねて持つ
3 手	手の甲をつつく
4 脚	向かい合い、膝同士を接触させて玩具を渡し合う
5 手 腕	相手の上腕をこすりながら声をかける
6 腹部 背部	腹部を椅子に座っている幼児の背面に接触させて立つ
7 手	じゃんけんしている手を軽くたたき合う
8 手 腕	玩具を持っている腕に手を重ねる
9 手 肩	肩に両手を乗せ体重をかけながらジャンプする
10 腕 腹部	腕と腹部を接触させて歩く
11 手 背部	背中に手をまわしつかんで引き寄せる
12 脚 脚	寝転がって足をあげ別の子どもの太ももに寄りかからせる
13 手 腕	玩具の取り合いで相手の腕をつかむ
14 手 背部	背中を押さえる
15 背部 腹部 腕	電車ごっこで前後の子ども同士で背中と腹部を接触させて座る
16 手 背部	人形を男児の背中に押し付ける
17 肩 腕	肩を抱いて誘導する
18 背部 腹部	電車ごっこで4人で背部腹部を密着させて動く
19 脚 脚	脚と脚を接触させからませて寝転がる
20 背部 脚 臀部	背中にまたがって乗る
21 手 腕 肩	肩に手を置き、後ろから肩を抱く
22 背部 腹部 脚	寝転がっている子どもの背部に足を乗せる。相手が体を反転させるとそのまま腹部に乗せ続ける
23 胸部 背部 腕	後ろから抱き着く
24 手 胸部	別の女児を追いかける男児に「待って、待ってったら」といい胸に手をあてて押さえる
25 手 腕	追いかけている後ろから腕をつかむ
26 手 腹部	手洗い場に並びながら横入りをした子どもの間に手を差し込み、しがみつく
27 手 腕	手をつないでいる男児二人の間に手を差し込む
28 腕 背部 腹部	後ろから抱きつき持ち上げる。持ち上げられた子どもが抱きつき返す
29 腕	腕を組んで歩く
30 頭部 手	トランプのカードを相手に教える子の頭を「教えるのやめてよー」と押さえ、なでながら押す
31 背部 腹部	うつぶせている子どもの上に乗る、レスリング遊び(たたかいごっこ)を始める
32 手 脚	脚を引っ張って引きずる
33 手 背部	背中をたたく
34 腕	腕を引っ張って引き倒す
35 背部 腹部	他の子どもが入ってきて体を乗せる
36 手 腕	腕を引っ張る
37 腕 背部 腹部	腕を引っ張りながら体を相手の背部に密着させる
38 背部 腹部	「いやああああ」と言いながら自分の体を相手に密着させる
39 背部 腹部	体を乗せてレスリング遊びを始める
40 手	手で相手の体をはらいながらたたかいごっこ
41 手 腹部	寝転がっている子どもの腹部を3人で手で押す、足を引っ張り床を引きずる
42 手 腕 腹部	4人で体を引っ張ったり押ししたりしながら遊ぶ
43 手 腕 首	うつぶせの子どもを後ろから首に腕を回して「おかたづけしてえー」と言いながら引起こす
44 頭部 肩	ブロックの上に恐竜人形を並べて遊びながら相手の方に頭を乗せる
45 頭部 脚	レスリング遊び。足を相手の顔に押し付ける
46 手 腕 腹部	ボールの取り合い。身体を接触させながら引っ張り合う
47 腹部 脚	相手を蹴って倒す。起き上がって向かってきた子どもを再度蹴り倒す

(筆者作成)

表中1番の頭部をなでる接触では、図1のような接触方法で、当初は相手をたたく動きをし

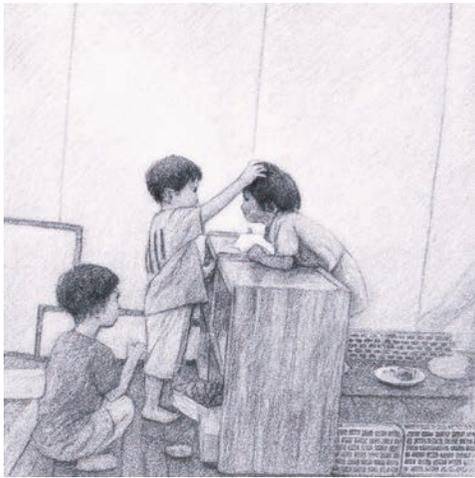


図1 頭部をなでる（筆者作成）

の肩に自身の頭を乗せながら同じ遊びする場面も見られる。図2に、44番の接触場面のビデオからキャプチャーした静止画を絵画タッチに変換したものを示す。同じように恐竜の人形を並べる動きをしながら、身体同士も接触させているが相手は拒まず、自身も表情を弛緩させている。砂上・無藤（1999）の指摘のように、同じ動きによって親密さを感じ取り、接触しながらその弛緩や快の共有、共鳴が起こっているのだろう。

ていたが、相手が乗り出してくると頭部を叩く真似をしながら突然撫でるかかわりに転換し、いざこざへの発展を回避している。このように手や腕で相手に触れるかかわりは全体を見ても32場面と多く、意図をもって相手に触れて慰撫したり抑制したりしていることがわかる。

一方で、手や腕でない部位で接触している場面も15場面あり、幼児は無意図的に身体のある部分を接触させながら遊んでいることもわかる。たとえば、15番や18番のように電車ごっこで並んで歩いたり、ブロックで囲まれた中に背部と腹部を密着させながら遊び続ける場面や、44番のように、相手



図2 同じ動きをしながら頭部で接触する（筆者作成）

他にも、rough and tumble playやplay fightのような激しい身体的かかわりも見られた。相手の身体に乗り上がりたり取っ組み合ったりと激しいかかわりであり、子どもたちも「やめてー」と声をあげたりしていたため、保育士に「乗らないで！」と制止されることもあったが、子どもたちにとっては遊びであり、制御しながらのやりとりである様子を示す。図3や図4のように体重をかけたり引きずるような乱暴なコンタクトをとっており、図5、図6のように引きずられる方の子どもも「いやあああ」と叫び声をあげたり「もうおしまいー」と言ったりもしているが、自分から腕を相手の身体に押し付けたりもしながら激しいコンタクトは続く。「やめて」といっているにもかかわらず表情は弛緩しており、攻撃を受けながらも自ら腕を相手の身体に密着させ、すぐに腕を組んで歩きだす。Smith（1997）や小山（2003）が指摘したように激しいコンタクトをとりながらも、表情や接触している身体の緊張度合を感じ取り、相手の攻撃が本気ではないことを受け取り、また拒絶も本気ではないことを読み取りながら、自分た

ちの遊びを維持しているのだろう。



図3 身体に乗り上げる
(筆者作成)



図4 「いやあああ」と叫びながら引きずられる (筆者作成)



図5 「もうおしまいー」と言いながら脚と腕を引っ張り合う
(筆者作成)

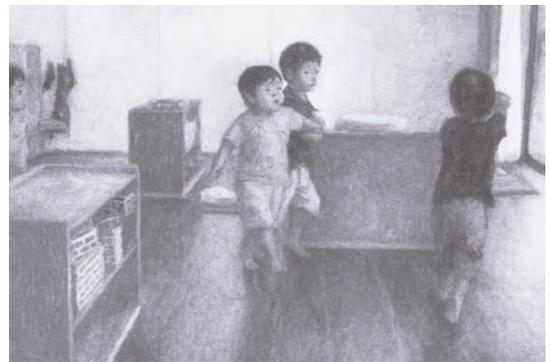


図6 立ち上がって「いやあああ」といいながら腕を密着させ腕を組んで歩く
(筆者作成)

このように幼児間では、撫でたりさすったりといった慰撫や仲直りとしての身体接触だけでなく、共有・共鳴や、相手の怒りや緊張を測ることに身体接触が用いられている。発達の様相や効果について検討するための予備的な観察として行ったため、今後データを蓄積し、ここで抽出された部位やパターンによる比較も行っていく予定である。

5. まとめ

大人は「言葉で」のやりとりを期待するが、これまで述べてきたように幼児期の子どもたちは言葉だけのやりとりをするわけではなく、むしろ表情や身体の緊張弛緩の状態まで含めた複雑なやりとりをしている。幼児期から視点取得などのメタ認知は発達を遂げていくが、言葉とは裏腹な心情が存在することへの理解が進むことでもある。大人は言葉でのコミュニケー

ションに固執せず、幼児の多様な情報取得や伝達的能力をもっと評価するべきではないだろうか。大人から見ると乱暴で避けてほしい身体的なコンタクトも、子どもたちの間では関係調整に役立っている。言語獲得途上にある幼児期の子どもにとっては特に、身体は仲間との重要なコミュニケーションツールとなる。幼児の集団においては身体同士のネガティブなかかわりとなることもあるが、リアルタイムに仲間の状態を測り、仲間を知り、理解する助けとなっている。時には状態を測ることに失敗するかもしれない。しかし社会的な葛藤が幼児教育で歓迎されるのは、その失敗やズレが相手と自分との違いに気づくきっかけとなり、相手の理解につながり、問題解決の経験も与えてくれるからである。年齢があがり決定的にネガティブな経験となる前に身体を通した理解の機会が必要ではないだろうか。

【参考文献】

- Harlow, H. F. (1958) The nature of love. *American Psychologist*, 13, 673-685.
- 広瀬美和 (2006) 子どもの調整・仲直り行動の構造：保育園でのいざこざ場面の自然観察的検討. *乳幼児教育学研究*, 15, 13-23.
- 広瀬美和・柴山真琴・福元真由美 (2018) 3歳児の葛藤処理方略の発達過程—幼稚園生活における変化. *東京学芸大学紀要 総合教育科学系*, 69(1), 141-148.
- 小山高正 (2003) 遊び・ケンカ. 根ヶ山光一, 川野健治 (編著) *身体から発達を問う：衣食住のなかのからだところ*, 218-220. 東京：新曜社.
- 根ヶ山光一 (2002) 発達行動学の視座—〈個〉の自立発達の間科学的探求. 東京：金子書房.
- Olausson, H., Wessberg, J., McGline, F., & Vallbo, A. (2010) The neurophysiology of unmyelinated tactile afferents. *Neuroscience & Biobehavioral Reviews*. 34(2), 185-191.
- Piajet, J & Inhelder, B., *La representation de l'espace chez l'enfant* Presses Universitaires de France, (1948). (Piajet, J. & Inhelder, B., E. J. Langdon & J. L. Lunzer, Trans., *The child's conception of space*, Routledge & Kegan Paul, 1956.)
- Portmann, A. (1951) *Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen*. Basel: Verlag Benno Schwabe. (高木正孝 (訳) (1961) *人間はどこまで動物か*. 岩波書店)
- Smith, P. K. (1997) Play fighting and real fighting: Perspectives on their relationship. In: A Schmitt et al (Eds.). *New Aspects of Human Ethology*. New York: Plenum Press.
- 砂上史子 (2021) 「おんなじ」が生み出す子どもの世界—幼児の同型的行動の機能—. 東京：東洋館出版社.
- 砂上史子・無藤隆 (1999) 子どもの仲間関係と身体性—仲間意識の共有としての他者と同じ動きをすること—. *乳幼児教育学研究*, 8, 75-84.
- 高坂聡 (1996) 幼稚園児のいざこざに関する自然観察的研究. *発達心理学研究*, 7(1), 62-72.
- 山口創 (2004) 子供の「脳」は肌にある. 東京：光文社.

Physical contact in young children's social interactions: Exploring fellowship through the body

Miwa Hirose

Abstract

This report explores the aspects of how young children adjust their peer relationships and understand each other through physical interactions. In childcare and parenting situations, verbal communication is often considered more desirable, but physical (non verbal) communication is often used in interactions between young children. In order to demonstrate that young children communicate in a complex way that goes beyond language alone, we report on an exploratory study that used naturalistic observation to identify the types of physical contact that young children make when interacting with each other in group settings such as daycare centers and kindergartens.

Keywords: young children's sociality, physical contact, peer relationships